

惱に染められて居る。と云ふこともありません。それで是は本來のものでないと云ふことになる。もう一つ云ふと煩惱と云ふものは、元來存在して居りませぬ。自性清淨であります。

けれども姑く自性清淨の所へ客塵煩惱がかぶさつた、汚れて居る。だから本來のものは常涼清淨にして何にも變つて居らぬものであり、涅槃界も衆生界も、眞如界も衆生界も、同じことで離れて居らぬものである。さう云ふ工合に見たのが實のものだ。「如實知見三界之相、如來は斯くの如く見て居る。吾々は目玉が下等だから斯くの如く見られぬ。如來の目玉は上等なるが故に、衆生界即ち涅槃界、常涼清淨不變のものであり、如來藏は眞如を離れぬものであると斯う見てゐる。それが茲にある「非實非虚非如非異」と云ふ字であります。之を四種の相と云ひます。

此の相を離れて見なければならぬ。之を離れなければ、今申しました斯う云ふ見方が出来る。吾々は實と云ふものを見ると同時に虚を見ます。神戸と云ふ市は兵庫縣のどこらにある。あの市か、あの市は此の間空へ舞上つてしまつたと云ふのは、實に非ず

虚である。吾々は神戸と云ふ市は、地面に喰ひついて、海の邊にあると思つて居る。實のものを見たり、虚のものを見たりするが、舞ひ上つても居らねば、地面に喰ひついても居りませぬ。「本來實に非ず虚に非ず。如に非ず異に非ず。」同じものでもなければ、違つても居らぬと云ふことです。

同じものといへば、手つ取り早い所で申上げますと、茲に紙がある木がある、紙と木とは是は一緒ではございませぬ。紙木の如し木紙の如し、斯う云ふことはない。是は如に非ずといはなければならぬ。さうすると此紙は何で捲える。木のバルブで作つた。片一方はバルブにして紙に使ひ、片一方は木の儘使つた。異に非ずといはなければならませぬ。斯くの如く見たのが本當の見方であります。紙と木とは異ふと云ふのも間違ひである。同じと云ふのも間違ひである。紙になつたら字を書く、木になつたら家を建てる。同じものなら紙で家を建てるわけです。子供の玩具は別ですが、そんなものはありやませぬ。如實知見でものを見た時には、紙は紙の相の儘木と同じものであり、木は木の相の儘紙と同じものである。而も紙と木とは異うて居ると見な

ければなりませぬ。それですから三界の如實の相は、衆生界其の儘涅槃界と、斯くの如く見るから、本來常涼清淨不變のものである。是は佛性の義になりませぬ。

斯う云ふ見方は學問では言へても實際に見えませぬ。例へばお腹が空つて來た時に、牛肉を差つけられたら誰でも喜んで食ふ。窒素は空氣の中にある、酸素も空氣の中にある、水素も空氣の中にある、斯う思つたら牛肉を食はなくてもよさ相に思ふ。成る程學理としてはそれでもよろしいが、實際は却々そんな工合にまいりませぬ。

それで今度如來のえらい所が分りましたものだから、如來はもう一つ言つて來た。如來は「常住不滅」のものだ、抑も如來は成道すると云ふこともないが、滅度すると云ふこともない。始もない終もない。茲で涅槃經の如來常住の義を出して居ります。「一切衆生悉有佛性」を出して居ります。一番最初の日、法華、涅槃、無量壽と云ふものは、一本棒になつてゐると云ふことを申し上げました。此の三界の相を如實知見する如來の智慧を言つた裏に、其の智慧によつて見る所は一切衆生悉有佛性である。それを涅槃經に引出して居ります。

全體、天臺大師の言はれました一念三千の義は、皆壽量品によつて居ります。如來は如實に三界を知見する、過去久遠より已來常住不滅であると云ふ、此の義からみんな割出して來て居ります。天臺大師の一念三千の義は此の外にございませぬ。

それから今度面白いのは、此の次に醫師の喩と云ふのがございます。今迄は少し學問の難しい所へ來ました。今度はずつと樂な醫者の喩でございませぬ。之を申し上げます。

是はどう云ふ喩かと云ふと、子供を澤山有つて居るお父さんがある。まあ皆様方の様なお父さんでせう。このお父さん却々智慧のあるお醫者さんです。ところが或る用事の爲に、遠い外國へ出て行く。どこに居るやら住所不定と云ふわけで、あつちへうろろ、こつちへうろろ行つて居る。私は子供が居らんから構ひませんが、澤山學生が居る。斯う云ふ子供達が、父の留守の間に色々な物を食つたり、腹痛を發したり、ぐるぐる舞うて居ると書いてあります。「悶亂を發して地に宛轉す」と書いてあるから、ぐるぐ

る舞つてゐたのでせう。其の時父が歸つて見ると、毒を飲んだり何やらして、ぐるぐる舞うて居る。子供達はお父さんが歸つて來たので大變喜んだ。父さんどうかして呉れ、どうも痛うてならぬ。何とかならんでせうか。これでは死にます。お父さん死なぬやうにして下さい。「更に壽命を賜へ」と書いてある。お父さんは、「難しい話だがどうぞ死なぬやうにやつて下さい。」と嘆願する子供の様子を見ると、大分事が重大である。何とかしてやらねばなるまいと云ふので、色々良い藥を調合して飲ませた。非常によいと云つて治つた。

所が子供の中で餘り病氣がひどくて、ぐるぐる舞つて既に氣を失つて居るのが居る。亂心して居る者は、隨分熱がひどくなつたり、嘔言を言つたりして、幾ら藥を飲めと言つても飲みはしませぬ。是はいかぬ。何とか一つ考へて、飲まさなくてはどうもならぬ。亂心してしまつてどうしても飲まない。これではどうも仕様がなぬ。どうでもこの藥を飲まさなければならぬ。お父さんは心配で堪りません。そこで方便を使つて、子供達を救ふことを考へた。私はもう年が行つて、今度餘所へ行つたら或は死ぬかも知

知らぬ。俺が死んでも茲に藥を残して置くから之を飲めよ。斯う言つて餘所へ立つて行つてもう歸つて來ぬ。それから自分の手下をやつて、「お父さんはお氣の毒なことで、どこそこでもとうとうお亡くなりになりました。」と斯う告げしめた。其の時分には小供達も熱が下つて、亂心が正しい心に戻つた。「大變なことだ、お父さんが死んだ、今迄はざり／＼舞うても何か食はせて呉れてゐた。お父さんが死んだといふことになつたら一大事である。此の間貰つた藥だけは是非嘔んで、早く體を丈夫にして、お金を儲けぬとどうもならぬ。」と云つて、藥を皆嘔んだ。さうした所が、中毒して亂心までして居つた者が、だん／＼／＼治つてよくなつた。それからお父さんは、その話を聞いて密かに家に歸つて來た。「あ、お父さんは死にはしなかつたのだ。一時ひどい病氣で、さう云ふ説が傳はつたかも知らぬが、幸ひ助かつた。」「大きに有難うございました。これからお父さんの言ふことをきつと聞いて藥を嘔みます。」と云ふのが、醫者の喩であります。

佛はこの喩を引かれて、お父さんは斯う云ふ方便を用ひて、子供達を全部救ふことが

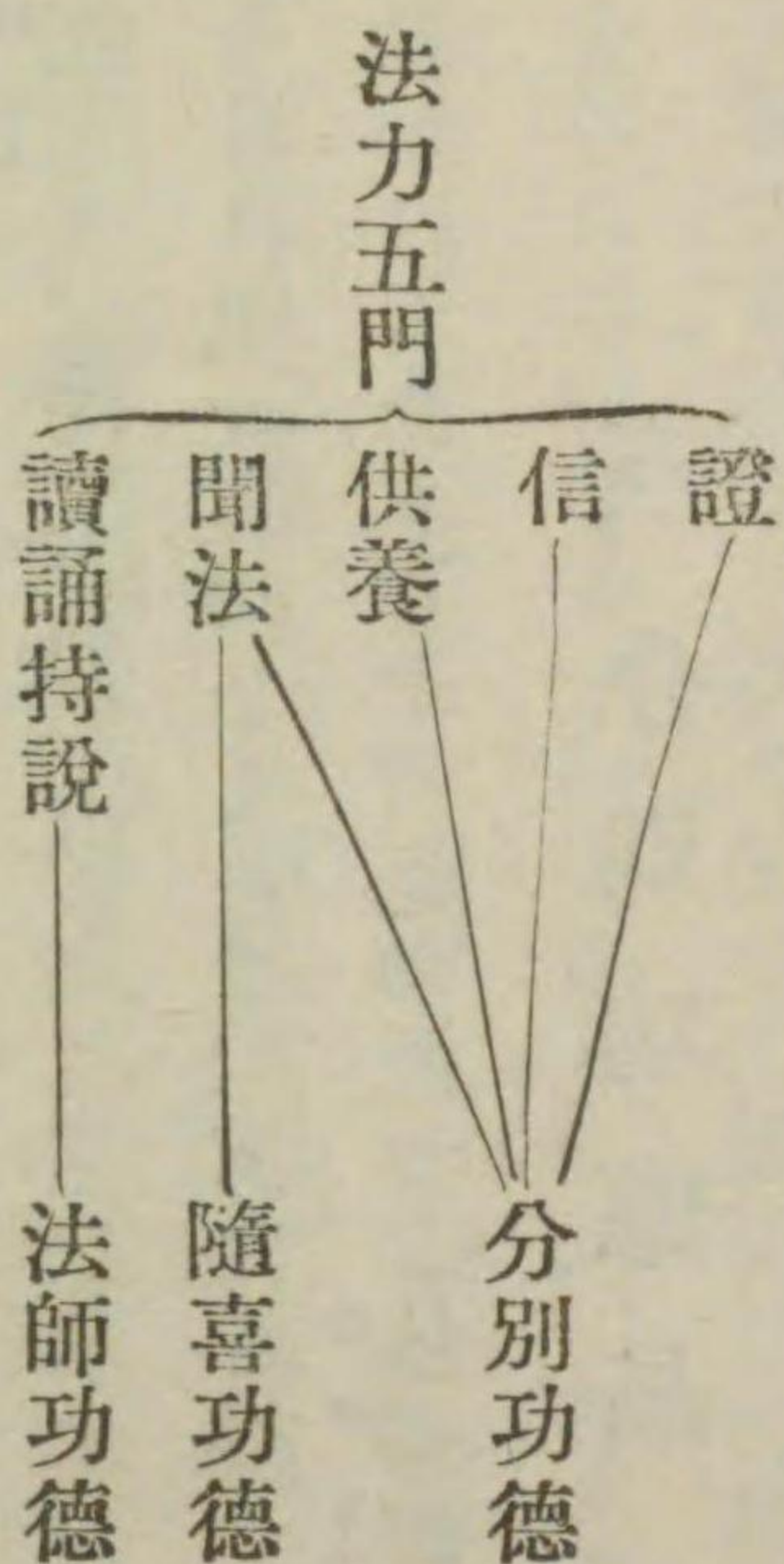
出來た。お父さんは嘘つそを云つたのではない。是は方便と云ふものである。お前等は私が生きて居ると云ふと、いつまでもなまける。今日聞かなくても明日聞ける。明日聞かなくても明後日聞ける。と云ふ工合で遂ひになまけてしまふ。中には俺はもう十分これで悟つて居る。何、悟りには色々あつて、それはそうかも知らぬが、僕は僕で一個の悟を取つて居る。斯う云つて威張つて居る増上慢ぞうじやうまんの手合がある。へこたれた者はまた聞きに行けば分る。何とかなるが、今亡くなると云ふことになる、待つて呉れ〜と云ふことになつて来る。愈々亡くなつては仕方がない。今の間に聞いて置かなくては、言はれた通り、お経通り行かなくてはならぬ時に、まごつく様なことがあつてはならぬ。一分の悟なんかえら相さうなことを云つても、大分親方と藝が違ふのだ。あなる迄行かねばならぬ。兎に色々今迄自分のなまけたり、横著して居つたのを、懺悔したり發奮したりして、すつかり以前と變つて、今度行をよくして来る。その爲に俺が死んで見せてやるのだ。如來が涅槃ねはんに這入つて見せるのは其の爲なのだ。釋迦如來しやくか にょらいは亡くなつて居らぬ。亡くなつて居らぬが、亡くなると云ふと、彼等がびつくりする。

びつくりすると氣張り出す。佛は唯方便ほうべんりき力を以て涅槃ねはんを示したに過ぎないのである。是は方便品ほうべんぼんの一乗が本當であつて、何も二乗三乗があるのではない。お前等ひよろひよろしたことをする、へこたれる、威張る、色んなことがあるが故に言ふことをさかぬ。故に二乗三乗を見せてやつたのだ。と斯うお仰しやつて居ります。即ち唯有一乘法ゆいいついちやうほう無二亦無三むにやくむさんは、横に方便を以て、二三を示すのだと云ひ、壽量品じゆりやうぼんでは豎に持つて來て、久遠くゑんより今日に至る迄同じことで、何にも變つて居らぬ。方便を以て斯う云ふ具合に見せたと説かれてあります。此の二つが法華經ほけきやうの大趣意でございます。

一六、分別功德品

今迄如來壽量品じゆりやうぼんで先づ法門の大要を終つて、これから後は此の法を聞いた者にどう云ふ利益があるか。と云ふことに就て、この品ではこれ〜の功德があるのだと、色の種類の功德が示されてあります。いくら聽いても何にも役に立たぬやうなことは何んにもならぬ。役に立つことを聽かねばならぬ。それではどう云ふ利益があるか。

これから利益門です。商賣にしてみても、利益のない商賣では、飯の食ひあがりになります。佛の法も大なる利益がなければ聴く必要はない。ところがこれは又大なる利益があるのです。その利益を分別して、色々の區分に別けて、利益を論じてあります。茲には婆薢槃頭は法力五門と言つて居ります。



功德と云ふのが三つになつて居ります。

分別功德品第十六

隨喜功德品第十七

法師功德品第十八

とつゞいて來て居ります。一番初めの三つ半は、分別功德の下に出て來て居ります。此の分別功德は却々面白うございます。ざつと申し上げて置きます。

茲に有名な御文がございまして、如來の壽量と云ふことは、數限りの分らぬ久遠なものである。と云ふことを聞いて、成程とたゞ一寸それを信じただけで、其の功德と云ふものは、數限りのない功德があるのだ。八十萬億那由佗切の間、五つの波羅密を行ずる。八十萬億に那由佗を掛けてそれに五十億を掛ける間と云ふのです。前のより短かうございすけれども、それでも相當長い。其の間六波羅密のうちの五つをつゞけさまにやつて、さうして行つた所の功德と、如來の壽量は無限である。過去無限、將來無限と云ふ。此の無量壽と云ふことを聞いて、洵にさうだと信じただけの功德と比べて見ると、百分千分百千萬億分、數勘定の出來ぬ程を分母とした一分に及ばず、五波羅密の功德の方が小さい。八十萬億那由佗切の間、五つの波羅密を一生懸命にやつても、佛の壽命無量壽といふことを知らなかつたら、薩張り駄目なものだと謂ふ。佛の壽命無量と云ふことを信じたより、百分千分百千萬億分乃至數限りもない大きな分

分別功德品

母の一にも當らぬ位、一方は小さく一方は大きいのだ。と斯う言つて來て、又もう一つ推して、私の此の壽命は無量數である、過去久遠であり、未來も永久であると云ふことを聞いて、お前がそれを信じたとすれば、即ちそれが釋迦佛が、今日グリドフラクータ(Gridhrakuta)の峰の上で、此の妙法蓮華經を説いて居る、その現場を見て居ると同じことだ。斯うでございます。

さう見えなければ本當に分つて居らぬ。佛は涅槃に這入らない。永久不變であるから、永久に法華經を説いて居るものと、吾々は見なければならぬ。佛は時々休憩して休む。そんな不調法なことはありませぬ。ずつと過去より今日に至る迄、のべつに法華經を説いて居れば、將來も同じく説いて居るものである。そう云ふ工合に見えなければなりません。又さう見えると書いてあります。是が「常在靈山」と云ふ、天台宗日蓮宗のやかましく言ふ所でございます。さきの「久遠」といふ字を使つて、日蓮上人は身延山に久遠寺といふお寺を造つた。此のお寺の名はあれから來て居ります。それから又五つに分けて、之れに皆功德がございます。

一七、隨喜功德品

此の隨喜と云ふことは、佛教専門の語でございますから、知らぬ方があるかも知れません。それで一寸説明申上げて置きます。例へばよいことをしたと云ふ話を聞いて、「御尤もである、私もそう云ふことをしたい。」と思ふ心が起る。それで今の言葉で贊成すると云ふ意味のことだと、軽く御覽になつたら、餘り間違ひございませぬ。又例へば人が慈善の行ひをせられた。其の人の話を聞いて、「非常に善いことをせられた。私も若し力量があつたら、あの人のする位やりたい。あれ位の力量がないから出來ぬ。」よいことをせられたと喜べば、自分がそれをやつたと同じだけの効力が現はれて居る。是れが隨喜の値打でございます。

此の分別功德で、證をやつた功德、信をやつた功德、供養をやつた功德、法を聞いてやつた功德、此の四つの功德の出で居るのに、成程結構でございますと贊成をする。それで隨喜功德になつて來ます。またどんなに云つても能力が足らぬから、自分で出來

ぬものがある。一圓出す力の者と、百圓千圓出す力の者と違つて居ります。一圓には一圓の精神がある。百圓乃至百萬圓には百圓乃至百萬圓の精神がある。それに賛成して喰付いて行く時には、即ち隨喜功德になります。妙法蓮華經を聞いて居る、講釋して居る、信じて居る、結構な教である、有難いことであると云つたのが、隨喜功德であります。

私は今日斯うやつて妙法蓮華經を講釋して居りますから、私自身功德を頂戴して居る譯であります。聞いておいでるあなた方も亦妙法蓮華經によつて、功德を蒙つて居らつしやる。洵に結構なことであります。昨日船井さんが茲に立たれて、「どうぞなるべくお誘ひあはせて來て頂き度い」といはれた。これも亦隨喜功德であります。自分がそれを聞くだけではない。「人を呼んで呉れ」と云ふ、これは隨喜功德の一つのよい例であります。もつと微細な事に就て申し上げますと、茲に幾つかの腰掛がある。人が増えて來ると腰掛が足らなくなつて、立つて居る人があるやうになる。「半分これを貸しませう」そこで腰掛椅子を一つ與へたと同じ功德になつて居る。椅子があればやる。

無くなつて居るから仕様がな。半分でも貸してやらうと云ふ。それですから隨喜と云ふことは、非常に範圍が廣い。廣告、勧誘、これらは皆其の趣意に賛成するからである。光壽會員を寄せて來うかと云ふのも、隨喜功德であります。私は講釋して居る、私は講釋で功德を頂いて居る。聞く方も同じだけ功德を頂いて居ります。疑つたら須臾の間に消えてしまひます。電燈のスイッチを捻つたら電氣は來ませぬ。それと同じく疑つて居たのでは、何時までたつても隨喜して、功德を頂戴することはございませぬ。疑はなかつたら言つて居る者も、聞いて居る者も、呼んで來る者も、同じく功德を頂戴して居る譯でございませぬ。

一八、法師功德品

是は常精進菩薩を相手に説かれて居ります。此の下では讀誦持説の功德があげてある。此の經を讀み、此の經を説き、此の經を忘れずに覺えて居る人達には、これ／＼の功德があるのだと、ずつと書いてあります。讀誦と云ふのは此の經を讀むことです。持と

いふことはつかまへて居ると云ふことであります。元來持の義は不失の義で、失はない、忘れない、忘失しないことであります。説は講釋する、私共は讀誦持説の功德を頂戴して居る。學問が足らぬので、やり損ひばかりやつて居りますが、兎に角この功德は頂戴して居ります。佛が常精進菩薩にお仰るに、この法華經を受持讀誦解説する善男子善女人には、斯う云ふ功德がある。それは

六 根 清 淨

山へ行く行者さん等が、金剛杖を持つて、六根清淨と云つて行きますが、六根清淨と云ふことはどう云ふことであるか。六根と申しますのは、目とか耳とか鼻とか舌とか身とか云ふ諸根に、意を入れて、六根と申したものであります。根と云ふのは原字はインドリヤ (Indriya) と云ふので、木の根の義を表して居ります。けれども支那では根と謂ひませぬ。官の字を使つて居るやうです。兎に角人間の身と云ふことです。それがみんな妙法蓮華經を讀誦持説した功德によつて、淨くなると云ふことです。こつちが淨すると云ふことではないのです。淨すると云つてこんなきたない身は、淨くな

りはしませぬ。腹の中には餘り結構なものを貯へて居りませんし、淨くなりませぬが、向ふの法力により、それが淨くなると云ふことです。

此の分別功德から、隨喜功德、法師功德、十六、十七、十八を一括して、勝妙力無上と謂つて居ります。昨日玄義の時に申して置きました。どう云ふ所が無上で、結構な所かと云ふと、此の經の力が勝妙力、他に勝れた所の力があるために此の三つを出した。斯う云ふ次第でございます。

一九、常不輕菩薩品

是は面白い品でございます。此の常不輕菩薩品と云ふのは、常不輕と云ふ人があつたのです。此の人は色々大衆の前へ行つて「お前は必ず佛になれる。お前は必ず佛になられる。」と言つて歩いた人です。誰にでもビヤーカーナ (授記) を授けた。ところが大衆は承知致しませぬ。「ビヤーカーナは如來から授かるものだ。お前さんえら相たことを言ふことがあるか。」「いやお前さんは偉い。佛になる。お前を私は輕せぬ。お

前を私は輕せぬ。」と言つたので、常不輕と謂ふ。大方の人は、「お前は人をなぶつてゐる。人を馬鹿にする。」と言つたけれども、それでも「お前は偉いのだ。」と言つて居つた人であります。

その縁起を語りまして、「それを言つたのは私の前身である」と釋迦如來が言つて居られる。「其れを侮つた者は大變な罰を受けなければ、やはり他日もとへ戻つて、今日茲の會座に居る。今この會の中なるブハドラー Bhadrāpāla (賢護) 師子月等の諸菩薩等が、其の當時惡口を言つた衆である。今日それがちやんと悟を開いて斯うなつて居る。」と云ふことを説いたのが、常不輕菩薩品であります。是がやはり勝妙力無上を表し、住持力を現して居ります。さうして一面には菩薩のビヤーカラナも佛のビヤーカラナも、道理は同じことだと云ふことを表して居ります。

二〇、如來神力品

是もやはり勝妙力無上のずつとつゞきでございます。是はまた面白いです。釋迦如

來が他方國土の諸佛を呼んで來た。「俺がこゝでやつて居るから證據に立て。」と云ふ譯で、如來神力を現して、一切の諸佛から菩薩を呼んで來て、あらゆる世界の者を呼んで來たのです。「さあこゝへ證據が出た。」それを證據に立て、居ります。是がずつとさきの勝妙力の續きでございます。

二一、陀羅尼品

茲には却々難しい呪文が澤山出て居ります。これはそれ／＼皆密語でありますから、吾々の伺ひ知るところではございませぬ。この品では最初藥王菩薩が相手になつて居りますが、此の法華經を聞いて覺えて居るものがあつたら、非常な功德であると云ふことです。「其の時に守護の爲に、私は呪文を聞かせてやる。教えてやる。」と斯う云ふのでございます。「アネ、マニ、マナー、マ、ネー…」と云つた様な呪文が書いてありますが、どう云ふことか分りませぬので、説明致し兼ねます。さう云ふやうな呪文が書いてある、と覺えて居らつしやつたらよろしい。初めは藥王菩薩ですけれども、それ

からあと色々な先生が顔を出して居ります。殊に毘沙門天王も出て来て居ります。色々なものが出て来ますが、茲に一つ特徴のあるのが居ります。

羅刹女 Rakshasa

これは女ですが、人間を食うて生きて居る恐ろしい手合です。人間を食料にすると云ふ不穩な思想を抱いて居る、危険思想、不穩思想のこり固つた輩であります。矢張りこの一味に鬼子母と云ふのがありますが、これは自分の息子を食うて居る先生で、産んでは食ひ、産んでは食ひして居る。食料問題には困らぬか知りませぬが、兎に角不穩分子の一人である。其の不穩分子が皆やつて来ます。「吾々は悪いことは決して致しませぬ。悪いことをするやうな手合が来たら、やつて来てこらしめます。若し法華經を讀み且つ受持して居る人の所へ、化物共が悪作をしに来るやうなことであれば、其奴の頭を割つてやります。びつくりして敵はぬからもう來ぬやうになるでせう。私がつも追つて行つて、其の人を守つてやります。」私共法華經を講釋して居ると、先生方やつて来る。さう云ふ人間を食うて居るやうな人に、守つて貰つても少々險呑な

氣が致しますが、法華經を讀み出すと直ぐこれが来て擁護して呉れるのです。鬼子母神を日蓮宗などで祭つて居りますのは、これから来て居ります。是が法華經を守護すると云ふ責任を、佛前で誓ひを立て、居ります。それですから此の法を守る善い神さんである。善神の中には、昔から人間を食つた善神はありませぬけれども、どういふものか是は善神の中になつて居ります。

二二一、藥王菩薩本事品

この藥王菩薩と云ふのは、さつきからずつと相手に出て来て居ります。此の藥王菩薩もやはり勝妙力無上の中ですが、

行苦行力

であります。此の次の妙音菩薩品もやはり行苦行力を表す。是は非常に苦行をやつた人です。此の藥王菩薩と云ふ人は、大昔——此の世界の現れて來ない以前の大昔——の話がずつと茲に出て居ります。自分の臂を焼いて、佛に供養した豪傑です。さう

云ふえらい苦行をやつてのけた大菩薩である。それが今日の藥王菩薩であると、大變佛が褒めて書いてございます。さうして此の法華經と云ふものは、實にたつといものだと云ふことが説かれてあります。それから此の藥王菩薩の本事を説くのに、相手になつて居る菩薩は、藥王でなくして宿王華と云ふ。斯う云ふ菩薩が、佛が藥王菩薩のことを説かれるのを聞いて居ります。「藥王菩薩は斯う云ふえらい菩薩だ。それだからこの妙法蓮華經の功德と云ふものは、實に廣大なものである。」とやはり茲にもずつと法華經の尊いことが云つてあります。

「七寶を以て三千大千世界を満たし、佛及び大菩薩等に供養するよりは、此の妙法蓮華經の一句を覺えて居る方が、功德が多い。」
さつきと同じ理由でございます。

「川、流れなどのすべての水の中で、海が一番大きい。丁度その様に如來の説かれるあらゆるお經の中で、妙法蓮華經が一番尊とす。」
さう云ふ例がいくつもあります。

「此の經を聞くと云ふことは、一切衆生の願を満足させてやる。丁度喉の渴いて居る者が、水を貰ひ、寒い者が火を得て暖かになり、裸の者が著物を著、隊を組んで出て居る商人が、隊長が無くて困つて居る所へ、隊長を得、渡りに舟を得、病に醫者を得、暗がりに燈火を得、貧乏人が寶を貰ひ、國民に王様が出來たやうなものである……」

と云ふやうな例を擧げて、この經が能く一切衆生を救ひ、諸の苦惱を離れしめ、功德を與へて、所願を満たしめる等、諸の經法中、最尊第一なることが述べられてあります。

茲に一つ面白いのは、この品中に

女人成佛

と云ふ義があるのです。此の女人成佛は、元來昨日申し上げました、見寶塔品の下に、八歳になるナーガの王様の娘の、非常にえらいのが出て來て、舍利弗が疑ふといふと、直ぐ南に飛んで行つて成佛した。さう云ふのではない。あなた方仲間の凡夫女人が成佛することが書いてあるのです。

此の凡夫人が薬王菩薩本物品をよく聞いて、それを覚えて居つたならば、もうこれから女にならぬ。「どこへ行くのだ。」それは安樂世界阿彌陀佛の國の蓮華の中なる、寶の座の上に生れるのだ。極樂往生するのですが、これは往つてから後少々手数がかゝる。貪欲、愚痴、瞋恚、憍慢、嫉妬、さう云ふ煩惱と云ふやゝ、こしいものは極樂にはない。だから其の女が、こうした垢の爲に惱されず、佛になつて神通を得て無生法忍を得るのです。さうすると眼根清らかにして眼玉がよく見えるやうになる相です。

さきにも申し上げた様に、吾々の眼玉が悪いから、三界を間違つて見て居る。如來は眼がよいからものを眞直ぐに見る。あゝ云ふ眼が出来る。さう云ふ眼が出来ると、恒河の砂の數程の如來が見えるやうになる。えらい眼になつたのを讀めて、「お前はえらい。善男子、」で女が男になつた。善哉、善哉、善男子と、諸佛如來が讚めて云ふのに、「善男子、釋迦牟尼佛の所で、此の法華經を聞いて、さうして自分が覺えるばかりではない。人の爲にも講釋して、福德無量無邊、火も焼くこと能はず、水も漂はすこと能はず、お前の功德は千の佛が寄つて説いても盡さぬ程えらい。ずつとえらい者になる。」と書

いてあります。是が女人成佛の義でございます。

全體、龍女の成佛は、天臺宗等では皆やかましく言ひますが、此の凡夫人の成佛は餘り言つて居りませぬ。龍女はえらうございますが、あんな女は類例がたんとありませぬ。是は三毒の煩惱を起しつゝある女ですから、誰でも斯うなると云ふことです。

一三、妙音菩薩品

是も同じく妙音菩薩の緣起を説いたものです。此の菩薩も何やらえらい先生で、觀音さんに似たことをやります。三十四種類程色んな恰好に變えて、さうして衆生を濟度します。是は矢張り行苦行力を表して居ります。

一四、觀世音菩薩普門品

是は鳩摩羅什譯の、普通日本で使つて居ます妙法蓮華經でございますと、「觀世音菩

薩普門品第二十五」と謂ひます。それは昨日申しました提婆達多品が離れて居りますから、順送りになつて一品増して居ります。そこで餘所のお寺さんは、第二十五といはれる。添品は提婆達多品を、見寶塔品の中に入れてあるので、品の打方が違つて二十四でございます。普門と申しますのは、原字を

Samanantamukha

と申します。サマンタは普賢菩薩の普であります。普賢菩薩はサマンタブハドラ (Samanatabhadra) と云ふ原名でありますが、このムクハは口と云ふ字である。門も口の意味ですから、普門となります。是は直譯でございます。サマンタムクハを直譯して普門とやつた。どう云ふ所が普門かといふと、門と云ふのは皆さんお持ちでございます。門にも大小色々ある。この築港にある税關の門なんか大變にやかましい門で、門は出入の義だと思つてゐたら、出入をとめる義にもなつて居ます。吾々の靴を取上げられて、中を根こそぎ調べられる。自由港はそれがない。香港は致しませぬ。大連も昔は自由港であつた。關東廳が酒や煙草に税を掛けるやうになつて、皆門を拵

えて不自由になつた。あゝ云ふのは普門にならぬ。どこでも自由に通つて一向差支ない。それが普門です。詰り普門と云ふことの初めの義から言つたら、無門と云ふ義になりません。

何故門と云ふ字を使つたか。色々恰好を變へねばなりません。鐵の門であらうが、煉瓦の門であらうが、木の門であらうが、どこにもひつかゝる所はない。出入無碍である。そこでサマンタムクハと云ふ字が使つてある。是はどう云ふことか。一つ觀音さんの講義を特別にして置きます。これから少しばかり此の觀世音菩薩はどう云ふ人か申し上げます。

Aksayamati 無盡意

アクシヤヤマチと云ふ菩薩が居ります。其の菩薩を相手に佛が説いて居ります。初めに、「世尊！觀世音菩薩はどう云ふ譯でさう云ふ名を附けたのである？」佛が言ふのに、「ありとあらゆる所の衆生が、苦しくなつて、『觀音さんたのみます』と云ふと飛んで行つて、手傳つて、苦しみから救つて呉れるから、觀世音と云ふ。」今迄は行苦

行力でございましたが、今度は

護衆生諸難力

と云ふ力を出すのです。陀羅尼品も護衆生であります。あれは少うございます。茲に初めて大威力を出します。一切苦の衆生を引受けると云ふのですから、吾々屁古垂れるやうなことがあれば、観音さんに頼みに参りますと、どうかやつて呉れるのです。十分無理な注文が書いてありますが、それでも引受けてやると書いてあります。あれ位威力があつたら引受けられるでありませう。こつちがまづくて引つ張つて貰はぬのは仕方がない。それはたゞこつちがまづいので、観音さんが弱いのではないのです。色んなことが書いてあるが、一々やつて居つたら地球が廻轉しますから、詳しいことは天臺宗、日蓮宗のお寺さんか、禪宗もやりますから、そこらのお寺さんに、普門品の講釋をお聞き下さい。眞宗は割合に知りませぬ。

所が茲で一つ考へねばならぬのは、私共の苦惱を除いて呉れるこの護衆生諸難の力と云ふものは、成る程えらいに違ひない。觀世音菩薩も勿論そうであるから、この威力だけでもえらいに違ひないですが、而し是はどうも消極的であります。何かあつた時助けるのみで、何もない者は觀音さん一寸も助けて呉れぬ。貧乏せねば手傳つて呉れぬ。金持はどつち向いて居つても知らぬ顔をして居る。そんな不調法な觀音さんはありません。釋迦如来は初めからちゃんと調法に説いて居ります。どう云ふことを説いて居る。護衆生諸難の功德の中に、ほんの一萬分の一程の等級ではあります。一寸稍々積極的なことがあります。

それは何かと云ふと、女の子が欲しいと願つたら女の子が生れる。男の子が欲しいと願つたら男の子が生れる。男の子は福德智慧を持ち、女の子は洵に姿形の美しい正しい、立派な莊嚴の相をもつ女の子が生れる。これなど餘程積極になつて居ります。けれどもたかが迷の中の話である。子が生れると云ふことは、死ぬと云ふことのもので、生死と云ふことは、抑も迷だから、上等の男の子が出来ても、結構な女の子が出来ても、大したことはない。護衆生諸難力の稍々積極な所で、本當の積極はさう云ふものでありませぬ。吾々は此の本當の積極に行かねばならぬと思つて居ります。

それは一切衆生が、若しも觀世音菩薩と云ふ名を覺えた。其の觀世音菩薩と云ふ名を覺えた所の功德が、六十二億恒河沙の菩薩の名を覺えた功德と、正に等しくして量無き福德の利を得るとあります。

62億×恒河沙

相當大きなものです。一寸私共には分らぬ數字でございます。恒河沙と云ふことは、毎度出ることですが、ガンジスの河の沙のことで、ガンガーナデーヴールカー(Gangā-nadi-vāṭuka)と云ふのが原語です。可なり長い河でありまして、日本の中でいひますと、樺太のさきから臺灣の北位つながつて居る長い河です。其の河の河中でございすが、大きな所は一籽さゝめいぼる狭い所でも三百米、四百米はある。其の河にある砂の数はどれだけある。澤山な數でせう。一列に並べても相當大きい。一粒や二粒の砂ではございませぬ。勘定は誰かゆつくりやつて下さい。不肖にして私には分りませぬ。

此の邊にころがつて居るのは御影石とか長石の砂利で、粒が大きうございすが向ふのガンジス河のは、ヒマラヤのマイカシスト石の粒ですから、灰のやうなものです。

其の灰の數ですから大變な數字です。それに六十二億を掛けた、それだけの菩薩の名を覺えたと同じ功德があるのだと云ふ。觀音さんの名は、まあ非常によく利くものと見えます。さう言つてもまだ分らぬから、「其の上にあらゆる所の供養をする。其の菩薩に供養をする其の供養は多いと思ふか、少いと思ふか。」多うございします。「併し若し觀世音菩薩の名を聞いて、覺えて、一遍お辭儀したら、其の功德は同じことだ。それだから百千萬劫の間、私が説いても、其の功德は説き盡されぬ程である。」大變藥がよいので、甚だよく効きます。

所がどう云ふ譯でさう云ふことになるか。是には二つあります。

信力

畢竟智

是は觀音さんに限りませぬ。眞宗で云つたら阿彌陀如來の名であります。名に強い力がある。「どう云ふ譯か。」信力、畢竟智による。「信力と云ふのはどう云ふことかと云ふと、觀世音菩薩の名を稱へる時には、稱へる所の精神は、私は觀世音菩薩と同じ

になるのだと云ふ精神であります。例へば十圓札にしてみても、此の頃金解禁になつて居りますが、是は金貨と同じと信じて居るから十圓と受取つて居る。あれは紙だと云つて放つて置けぬ。さうすると信力は、觀世音菩薩の名を稱へる私は、觀世音菩薩同等の資格を信じなければならぬ。自惚で信ずるのではなくて、觀世音菩薩の力によつて、それだけのものになると信じなければならぬ。阿彌陀如來の名を稱へる時、阿彌陀如來の力によつて阿彌陀如來と同等になるのだ。さう云ふことが信力であります。それから畢竟智これは難しいです。是は一切法界のことを知るのだ。ダルマダーツ(Dharma dhātu) 即ち法界をどう知るのであるか、法界は法性だと知るのであります。

法界——法性

法性とはどう云ふのかと云ふと、一切諸佛の平等法身を知るのである。是は初地の菩薩の知る所である。初地と云ふのは十の位の一番下の位です。佛から十段下の菩薩が畢竟智を知るのである。私は觀音さんと同じ資格、同じ力になつて、引受けるこ

とが出来ると信ずる。これでよい。どうして畢竟智を知る。一切法界と云ふものの、法の性質通りと云ふものを知る。法の性質はどう云ふことだ。一切諸佛平等法身と云ふものである。さきに壽量品で「如來は如實に三界を見知る」と言ひましたが、如來は斯くの如く法界法性、一切諸佛平等法身を見て居る。その如く出来るのは信ずると云ふことです。一切諸佛平等のものであれば、六十二億恒河沙も觀世音も同じことになる。それが違つて居つたら一平等、一即六十二億恒河沙と云ふことはありませぬ。それですから、一切諸佛平等法身と知るのが、即ち畢竟智であります。これはどうしても第一義諦に入らぬと充分分りませぬ。それで學理的には信力畢竟智二つですが、畢竟智は信ずる縁に出て来る。つまり畢竟智を信ずると云ふことです。之を分けて、一は信の方面、一つは理性の方面と、二つに分けて言つて居りますけれども、實際は同じことと云ふことができます。

それから此の觀音さんは、えらい先生で何にでもなる。三十三身と申しまして、三十三通りの變化身があります。どこでも觀音さんの化現は、三十三身と謂つて居ります

けれども、三十三ばかりではございませぬ。何にでもなる謂れがある。茲に三十三擧げてありますから、斯う云ひますが、佛でも菩薩でも人間でも男でも女でも何にでもなる。餘り詰らぬものには一つもなつて居りませぬ。貧民になる、乞食になる、南京蟲になる、虱になる、そんなことは書いてありませぬ。偉い者ばかりになつて居ります。何故えらい者にならなければならぬか。えらくなければ救ふことが出来ない。能力が出来、力がなければ、大力の人を引張ることが出来ぬ。小力では引きづられる。それだから觀世音菩薩は下等なものになりませぬ。此の終ひに觀世音菩薩は是は全體極樂の菩薩だから、極樂の人だと云ふ證據の偈文がついて居ります。古い支那譯にはございませぬ。どうも觀世音菩薩の講釋がもつとしたらございませぬけれども、今日はこれ位にしてやめて置きます。

二二五、妙莊嚴王本事品

是は昔過去に妙莊嚴王と云ふのがあつた。其の王さんに息子さんが二人あつて、そ

れが出家發心した。それに引きづられて、父なる王さんも母なる皇后さんも、ついて來たと云ふことを説いたのです。それで二人の息子さんは、藥王、藥上の二菩薩であり、妙莊嚴王と、其皇后さんが、華德菩薩、莊嚴相菩薩だと云ふ昔のことを説いた。是は功德勝力を表して居ります。

二二六、普賢菩薩勸發品

普賢菩薩と云ふ人は、文殊普賢と謂ひ、いつでも釋迦如來の説法に缺かさぬ大事な人ですが、法華經の最中には居りませぬ。どこへ行つたか、文殊師利は頻りに活躍して居つたが、普賢は居らぬ。居らぬ筈です。何やら分らぬ程ずつと遠い東の方へ行つて居つたのです。それが歸つて來た。「どうした。」東の方の遠方の國に行つて居つた。所が法華經の説法があると云ふことであるから、それは大變と云ふので、娑婆世界へ歸つて來た。と云つて、ずつと澤山の幕下を引きつれて、引きかへして來た。そこで最初の會座に居らぬ。終ひに出て來て居ります。

さうして言ふのに、「此の妙法蓮華經は非常に尊とい。之を聞いて信じ、覺えて居る人には、私が全力を盡して保護する。邪魔に來る者は叩きのめしてやる。一切引受けて保護してやるから、どうぞやつて居る人は安心して呉れ。」とこれは護法力を表して居ります。輕蔑する人があればひどい罰を與える。是は危險人物の保護より大分よろしい。ちよこ／＼顔を出して貰つても、びつくりしませぬ。先のやうなやゝこしい先生には敵はぬが、この菩薩なら安心でございます。

鳩摩羅什譯の法華經は是が最後であります。サマンタパトラ (Samantabhadra) 普賢菩薩と云ふ人はえらい人です。是は華嚴經の講釋をいつか申上げる時に、此の普賢菩薩のことを説明申上げます。大無量壽經は半分以上、普賢菩薩の講釋であります。華嚴經は之を充分説いて居ります。觀世音菩薩の功德は、妙法蓮華經に説いて居ります。それから觀無量壽經にも説いてございます。皆お經によつて、主になつて居る人が違つて居ります。

二七、囑 累 品

愈々是が最後です。是は事務引繼ぎのことで、釋迦如來が此の妙法蓮華經を説いた。其の事務引繼ぎであります。「誰に引繼いだか」一切大菩薩に引繼いで、「お前等之を聞いて、未來の世まで傳へると云ふことを忘れてはいかんど。」と附囑して居ります。

此の囑累と云ふ字を講釋します。

Paridana

と云ふ字でございます。是はどう云ふ字義かと申しますと

Present, gratification

と云ふ譯がつけてあります。直譯致しますと、贈物と云ふことであります。大菩薩に妙法蓮華經を授けた。「之を受取つて忘れぬやうにして居れ。」是が囑累の義でございます。事務引繼ぎがすめば、あと何もやることはありません。これでお終ひになつて居ります。

所が、普通日本で使はれて居ります、鳩摩羅什の譯が悪いと思ふのは、此の事務引繼のものが、中間にはさまつて來て居る。さうして此の二十六普賢菩薩勸發品が一番終ひに來て居ります。是は原本が綴ぢられる時誤つた。それを其のまゝ翻譯して來たのでせう。此の原本と正法華とは、是が一番終ひに來て居ります。それが順でございませう。私もそれによつて申上げました。

二八、總 結

大要を是から申上げます。

大體この妙法蓮華經は、最初の日は經の原理を申上げました。「是が釋迦世尊一代の御說法だ。」と斯う云ふことを申上げました。それによつて現れて來たのが涅槃經である。それからその實行法を教へるのが無量壽經である。それで此の妙法蓮華經と無量壽經とに、「如來の爲すべきことは、我によりても成された。」と云ふ文字があると云ふことを申上げました。是は今日申上げました如來壽量品でございませう。あの場合には學

問の説明を申上げて居りましたから、文字は申上げませぬけれども、原文に其の言葉が出て居ります。たゞ此の鳩摩羅什の譯文は、譯が簡單で、それが明かでありませぬ。原文を今讀んで御覽に入れます。是は南條文雄譯でございませう。如來壽量品に斯うあります。「三界の如く三界を見ない」と云ふ譯でございませう。

「如來の説きたまふ如何なる語も、眞實にして虛妄ならず。その他にもあらず。されど種々の行、種々の樂欲、妄想行ある有情に、善根を生長せしめんがために、種々の法門、種々の所縁を示現したまへるなり。されば善家男子よ、如來は如來のまさに爲すべきことをなしたまふなり。」

斯う云ふことがあります。是が如來壽量品の一番大事な所で現れたのであります。

「如來のなすべき所の任務は私——釋迦牟尼如來——もやつたのである。」
是は無量壽經の原文でございませう。彌勒即ち慈氏菩薩に附囑した時に、斯う云つてあります。是は私が譯しました經文でございませうから、譯が悪いといけませぬ。原文を讀んで申します。原文はお釋迦さんが言つたのだから、間違ひございませぬ。斯う

なつて居ります。

Iti hy, Ajita, yat Tathāgatena kartavyam kṛtam tan mayā

是は私が言つたものではございませぬ。お釋迦さんが申した。翻譯すると一寸悪いかも知れませぬけれども、次の様なことであります。

ト云ヒテ、誠ニ無能勝ヨ、其ノ如來ニ於テ爲サルベキ事ハ、我ニヨリテモ成シ終レリ。

斯う云ふことです。妙法蓮華經の如來壽量品にあるのと、是は同じ言葉であります。大無量壽經の彌勒附囑の言葉と同じことです。

それでございますから、「此の二經と云ふものは、何等相違ないものだ。」と私は信じて居ります。たゞ説き明し方が場合によつて少し違ふだけで、二經の相違と云ふものはない。さうしてその學問的に研究されて、如來常住と云ふ壽量品の意味を、明快に解釋敷衍して來たのが、涅槃經である。また、十方衆生至心信樂によつて、若し極樂國土に生せしめずば、正覺を取らぬ。」と云ふあの願文説明の原理はどこにあるか。一

切衆生悉有佛性で悉く佛たる性質があるから、あゝ云ふ願文が出來上る。此の二經と云ふものは、涅槃經の解釋によつて、學理的説明が與へられる。これで三經は終始一貫して、釋迦一代の説法が一番これが基礎になつて居るのであります。

單に一部の學理の説明なら、まだ他のお經に重大なことが書いてあります、如來藏、常涼清淨、客塵煩惱は勝鬘經。不可思議解脱は維摩經。普賢菩薩の行願は華嚴經。一切皆空は金剛般若經と云ふ工合に色々ございしますが、一代説法終始一貫して、シユウツト一本棒に來て居るのは、此の三經でございします。これさへ完全に了得し得たら釋迦一代の説法の肝心がこゝにあると云ふことが出來る。私は妙法蓮華經は最も尊とい經典、一乘の妙典と信ずるのは、これだからでございます。

是はあなた方お疑ひになつてはいけませぬ。此の經典に對して、少しでも輕蔑の思ひをもつてはいけませぬ。大變な罰を受けます。佛の面前で佛を罵詈した罪より、是が重いと書いてあります。それですから、私は謹んで此の妙法蓮華經を頂いて居ります。眞宗の人の中には、妙法蓮華經を輕んずる不心得者があります。私は大變恐れ入つた

不調法と考へて居ります。私は眞宗信者でございますが、妙法蓮華經は洵に尊といふ經と考へて居ります。いつも此の經を讀んで居ります。今申す通り三經を同一と心得て居ります。

甚だ簡略でございましたけれども、一應これで妙法蓮華經の大要を申し上げました。尚ほ又細部になりましたは、各々専門の人がございませうから、どうぞこれに就てお聽き下され。

妙法蓮華經講話終

昭和六年五月十五日印刷
昭和六年五月十八日發行

妙法蓮華經講話奥附

定價金壹圓

述者 大谷光瑞

發行者 柱本瑞俊

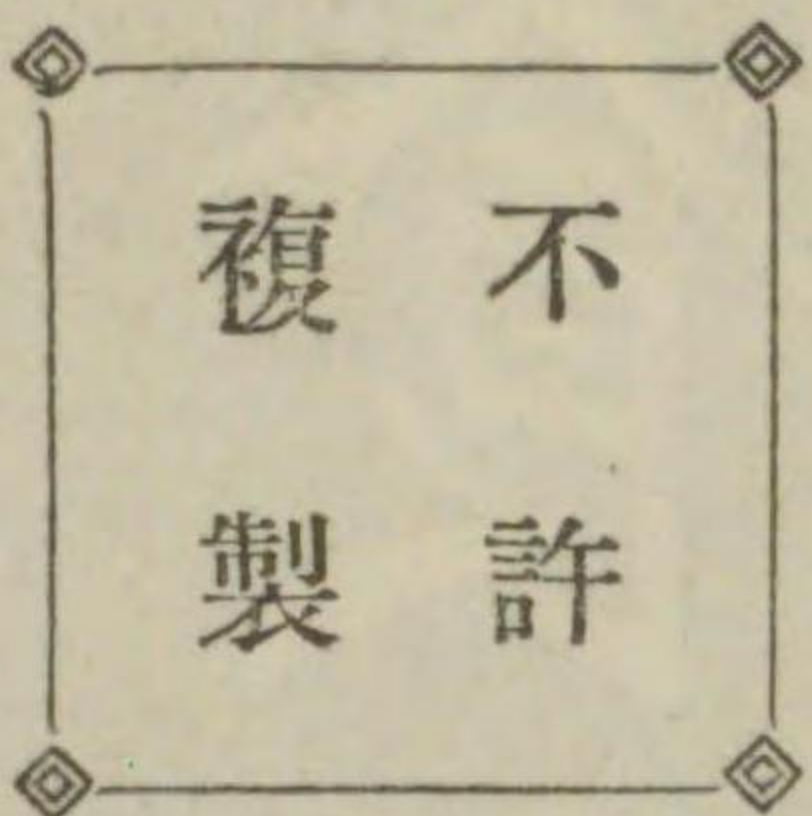
印刷者 渡邊安雄
東京市京橋區銀座西八丁目五番地

印刷所 民友社印刷所
東京市京橋區銀座西八丁目五番地

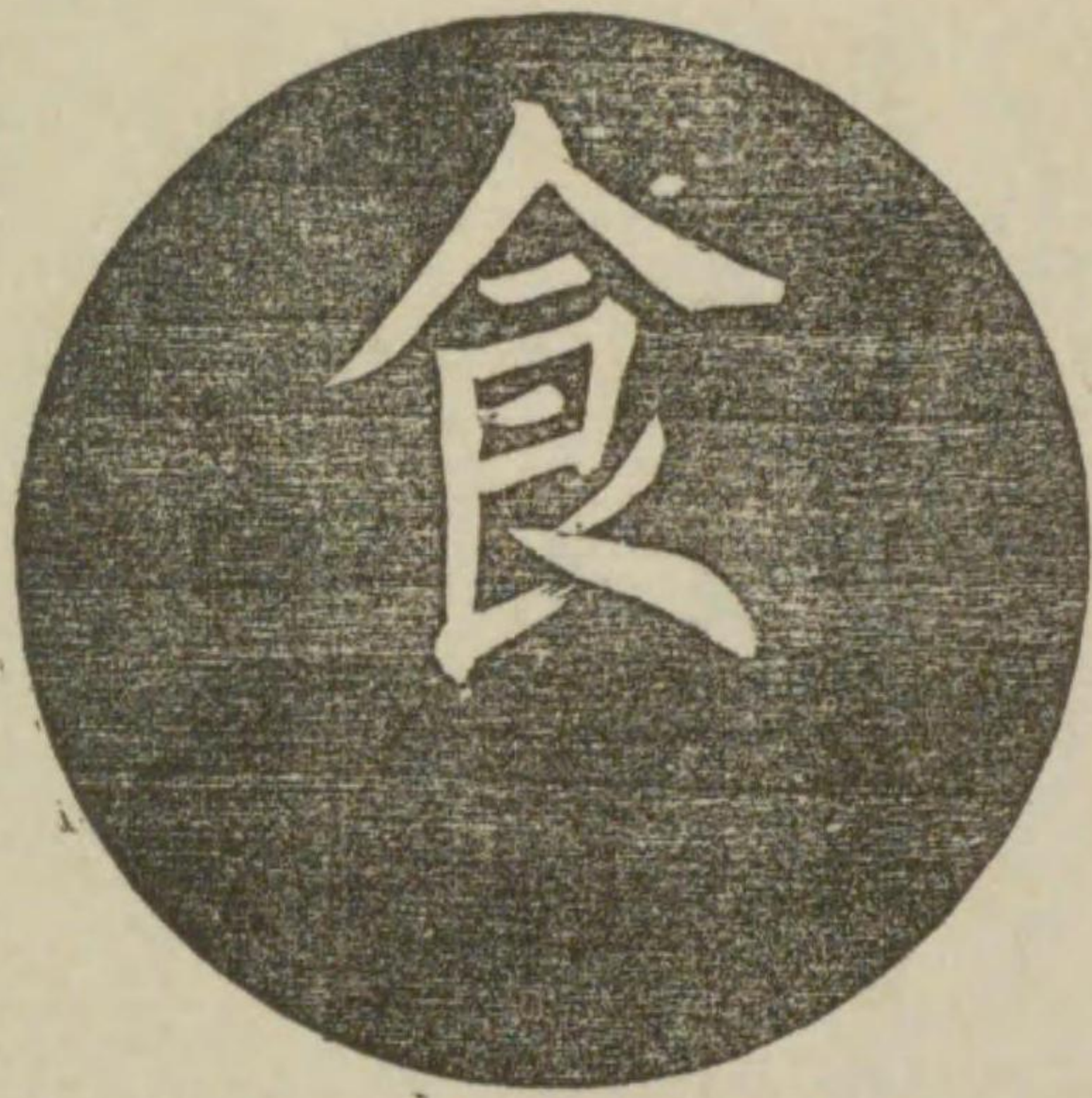
東京市京橋區築地三丁目十六番地

發行所 大乘社東京支部

(振替口座東京二二番)



◎最新刊◎
大谷光瑞師著◎



本書は先づ誤れる現時世上の料理を駁論し、徒らに形の美を逞ひ、眼を樂ませ、飢を醫するも、畢竟金錢の濫費に過ぎざるを明にし、如何にせば至廉の材料を以て、大牢八珍の美味を得べきかを説き、次に日本支那歐洲印度南洋諸國の料理に就て、著者自ら嘗破したるものを擧げて、食味の眞骨髄を究め、更に材料たる鳥獸肉及び蔬菜等凡ゆる食品に就ては、著者豊富の體験と、独自の見解とを以て、批判し解剖し、最も經濟的に最も美味しく食すべき方法を提示して、料理の極意を要約せり。之れ世上在來の料理書と、全く其の選を異にするもの、各家庭必備の指針として御愛讀を乞ふ。

全卷要目

- 四六判 四二〇頁
定價金貳圓八拾錢 送料金拾貳錢
卷頭寫眞版三葉(天文日記、茶道家元)
誤られたる現時の料理(藪内家に相傳古文書)
料理の眞價(一、人類と食 二、庖厨調理の技)
各種料理の概観(一、材料 二、拾配補佐)
一、日本料理 魚肉料理 味噌汁 炙魚 煮魚 液汁 アヘ
物 酢の物 香の物 米飯 麵 蕎麥 餅
パン 蔬菜料理 乾燥食品
鳥獸肉類 蔬菜類 油 異味 概評
佛國料理 英國料理 歐洲の蔬菜料理 各國
の料理 歐洲料理概評
二、支那料理
三、歐洲料理
四、印度料理
五、ジャバ料理
六、食論
七、肉類 禽類 魚類 蔬菜類 菌類 海草類 加工食品類
八、生果類 菓子類 飲料
附錄
一、奈良朝時代の食品 二、平安朝時代の食品 三、大饗料理 次
第四、齊民要術 五、食經 六、唐草巨源食譜 七、吳氏中饋錄 八、
陳達叟蔬食譜 九、隨園食單 一〇、現時上海著名料理品目表 一一、
現時上海素食食品目表 一二、現時佛蘭西巴里著名料理品目表

◎最新刊◎
大谷光瑞師述
國產の愛用

四六版一〇二頁並製
定價金四拾錢送料四錢

本書は曩に商工省の發表せる重要貿易品輸出入調に基き、百萬圓以上のもの約壹百種に就て、著者一流の犀利なる觀察と、經世的眼光に照し、一々懇切なる解剖批判を加へ、眞に輸入すべきもの、防遏すべきもの及び獎勵すべきものを明にし、以て國產愛用の眞意を道破したるものなり。幸に御一讀を乞ふ。

新刊 大谷光瑞師述 佛敎の大意

附録 額面用著者眞筆

「應信如實言」

縦一尺七分横二尺
木版彫刻、日本墨手刷
用紙最上支那紙
四六版二〇〇頁
定價金貳圓
送料拾錢

佛敎は近代科學文明と、如何なる關係の上に、如何なる特異性を持つか。引いて人生指導の立前は、如何なる原理の機能にあるか。本書は最新學說に準據して、佛敎の根本立脚點に、確乎不動の妥當性を検討し、佛陀力説の代表的經典の梗概を講述して、語源の基礎の上に、其處に内含せられたる、佛陀秘奥の中心觀念を闡明して、佛敎に新しき意義と價値とを附與した。適切なる例證と、平易なる釋明によつて、何人も一讀了悟せしめる底の、佛敎新解釋書であり、一面絶好の佛敎入門書である。

全卷要目

第一	緒論	佛敎の原本義理
第二	佛敎の俗義	第一義諦へ
第三	佛敎の俗義	第一義諦へ
第四	佛敎の俗義	第一義諦へ
第五	佛敎の俗義	第一義諦へ
第六	佛敎の俗義	第一義諦へ

第七	勝鬘獅子吼經
第八	入楞伽經
第九	般舟三昧經
第十	金剛經
第十一	能斷金剛經
第十二	大薩婆經
第十三	大方廣華嚴經
第十四	妙法蓮華經
第十五	大般涅槃經
第十六	無量壽經
第十七	結經

◎新刊◎

○大谷光瑞師述

四六判四四〇頁 上製函入
定價金貳圓 送料拾錢

無量光如來安樂莊嚴經講話

從來支那傳來なりし無量壽經は、今こゝに印度原典の經題により、初めて我が大谷師によりて江湖に紹介せらる。著者は多年の研究により、梵語原典を邦譯し之を講述して、如來の幽旨を啓發す。粥の味は到底米の飯に及ばぬ。其の委曲を傳へ正確を期するに於て、支那譯の遠く及ぶところではない。見よ相對差別の世界は、一つとして不自由拘束に非ざるは無い。如來は絶對無限の靈性だ。悲智圓滿の覺體だ。不可思議の妙相であり、宇宙の最高原理である。如來招喚の聲を聞き、眞實信に生くる者こそ、眞に自由安穩にして、現當一世に安住することを得。煩悶不平不快凡ゆる妄執に迷へる者、先づ本書に聞け。

大谷光瑞師著

大乘社支部發行

第十九版

帝國之前途

菊判 百六十頁
定價 金六拾錢
送料 金六錢

卷頭序文著者眞筆版

時難は刻々全國民の上に急迫し來れり。われ等は如何にしてこの難局を打開すべき乎。政治家よ、學者よ、實業家よ、すべての同胞よ、今は徒らに空論を闘すの時にあらず。一代の先覺者たり、指導者たり、實行者たる巨人大谷光瑞先生は、竟に此の熱血を以て綴れる名著を提げて立てり。巨人の指揮杖は今明確に前途の一大光明を指示す。國家の興隆、個々人の成功は諸君の目前に在るを知らずや。

第十三版

國民之自覺

菊判 百六十頁
定價 金六拾錢
送料 金六錢

著者は前著『帝國之前途』を以て經とし、新著『國民之自覺』を以て緯とし、八千萬の同胞悉く兩者を綜合研讀し、其の實踐躬行により、我國力の發展、國富の増進を期し、又一家の繁榮、生活の安定を得て、世界無比の皇恩に報ぜん事を希ふ赤心より本書を公にせり。冀くば諸賢の座右に一部を備へられんことを。

第五版

觀世音菩薩

四六版並製寫眞版挿入
定價 壹圓 送料 六錢

妙法蓮華經普門品(梵、英、漢、和譯)華嚴經普賢行願品、觀無量壽經觀音觀挿入

觀世音菩薩の御名は我々佛教徒にとつて欣仰すること久しきものである。然るに凡俗の徒はその來歴、由來を詳知するもの又稀である。甚しきは菩薩をして女人であるとなし、その説も亦區々、今此處に大谷光瑞師は大方の熱誠により、梵、英、漢、和の諸經を參照引例して本稿の述成る。師の科學的なる佛典解説は既に定評ある所、宜しく諸賢の御繙讀を俟つ。

第十版

見眞大師

菊判上製四百頁
定價 參圓 送料 拾錢

本書は本社々長の一大論文にして、堂々十三萬言、直ちに大聖親鸞上人の本旨を宣説して遺憾なし。今や百世の群生皆自ら閉して長く不測の深淵に墮せんとす。是れ寔に憐むべし。讀者能く本書に依りて大聖の眞面目を知り、併せて本願圓頓一乘の妙法に達するを得ん乎。

極樂莊嚴

四六判箱入天金 定價 貳圓
總クローズ製 送料 八錢

親鸞上人の胸中燦たる光明に満ちた極樂の莊嚴は、もはや宗教、哲學、道德の世界に逐はれ、科學の世界はその光を奪ひ、時代はこれを葬らんとしてある、こゝに於て社長は科學は如來の世界に於て始めて儼存するものなる事を宣し、現代人に甘露の法雨を澍いでゐる。眞摯なる讀者を俟つ。

版八

佛說阿彌陀經講話

送定四 判美本
料價 六 壹圓

近代のわが佛教聖典中最も普及されたのは此の阿彌陀經である。西方淨土の本願は正に此の經典より流出してゐる。本書は近代の俊學、大谷光瑞殿下の註釋本にして、その博學なる、その鄭重なる實に手をとつて親しく教へを受くるの感がある、苟くも阿彌陀經を稱ふる者の必ず手にすべき書である。

版四十

般若波羅密多心經講話

送定四 判美本
料價 六 七拾五錢

世に般若波羅密多心經を講ぜしもの決して少なしとせず。而して本書が他に卓絶せる所以は、直ちに印度の原書に依憑し、社長が該博の蘊蓄を傾倒し、その梗要を平明に譯述せられたるにあり。蓋し本書に於ては一々の語源に就て文法上より解義せられたるものなりとす。

賜台覽

第一義諦

送定四 判美本
料價 六 壹圓貳拾錢

絶對他力の平易簡明なる科學的解説は先人未踏の境地として眞に一世の大獅子吼、千歳不朽の名著なり。天下求法の士請ふ之に依りて悟道の彼岸に到達せんことを。

版十

佛教の原理

四六判クロース裝美本
特製 定價貳圓
並製 定價壹圓五拾錢
送料 特八錢 並六錢

佛教は今の人に解らないのではない。科學的の頭をもつた今の人々の方がよく解る。それに佛教は何か現代人とは無關係のやうに考へて居るから此書が出て居るのである。この本を讀んで見れば、過去も現在も未來も誰一人として、また何一つとして没交渉であり得るもので無いといふことが判る。

佛教の要諦

送定菊 料價半 截七拾紙 錢錢裝

內容 一、眞實相如 二、佛敎は宗教に非らず 三、物質と精神 四、一切皆空 五、眞正の教理 六、大慈大悲 七、同質異性 八、正確簡單迅速の方法、其他

他力眞宗

送定菊 料價半 截七拾紙 錢錢裝

他力眞宗の本義を明にして、其の實相と、假相とを辨じ、成佛の方法を説いたもので、眞に社長の警咳に接するの思ひがある。是こそは無明の闇に迷へる人士をして、光明の世界に入らしむる良書。

無題録

第一編 第二編 菊半 截
第三編 第四編 第一、二編 各八拾錢 送料
第三、四編 各八拾五錢 四錢

巨人世に興して、降魔の利劍を執り、亂麻の如き當面の非を悉く斷ち盡さんと居る。依つて、その觸るゝところ、克く截らざること無き痛刀の快味に對して、鬼神は哭し、聖者は恭敬禮讃して居る。また、具眼の僧俗は、この斷片の小題を讀んで教はざる救ひの尊さを看破するも、群盲は、この獅子吼に値ふて、遂に聲の如く啞の如くである。世の識者たるもの、速に、この縦横無盡に迷り出づる智慧の泉を掬して、大いに楽しみ、大いに利せられん事を切望して止まね次第である。

孫子新註

送定三 判美本
料價 六 壹圓

孫子を支那の古き兵書のみと閑却するものあらば大なる誤である。其の本領は外交、經世の眞髓を説く。是れを有るが活用によりて得るところ、國民昂る。定に政治、外交、商事、教育、日常處世上の活敎訓書として價値高く、是れが蓋し人生處世の好指針、國家立策の寶典として、大方の必讀を俟つ。

大谷光瑞師主宰

月刊
雜誌

大乘

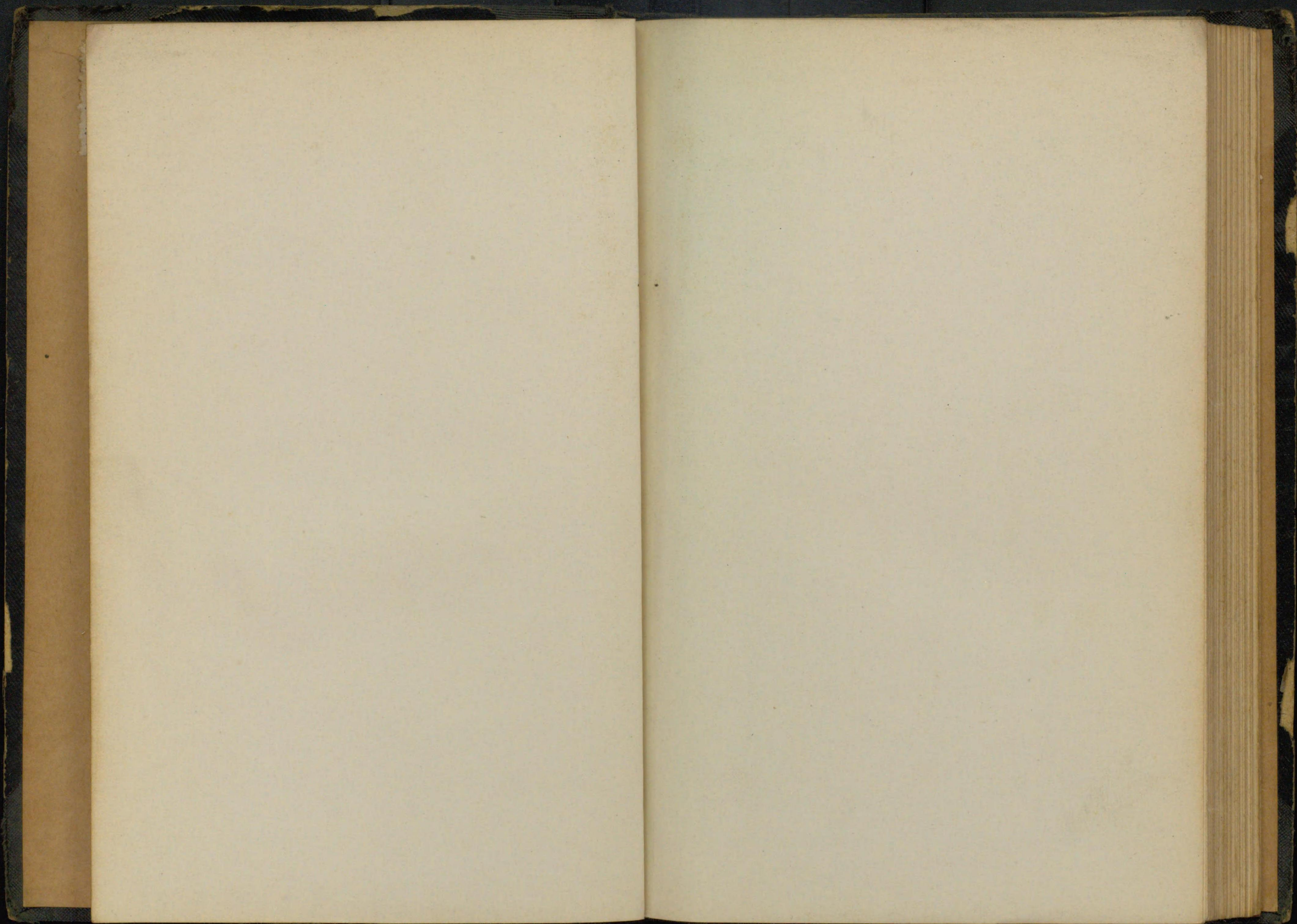
購讀料

（一部四拾五錢
半年二圓六拾錢
一年五圓）

送料 壹錢
（各送料共）

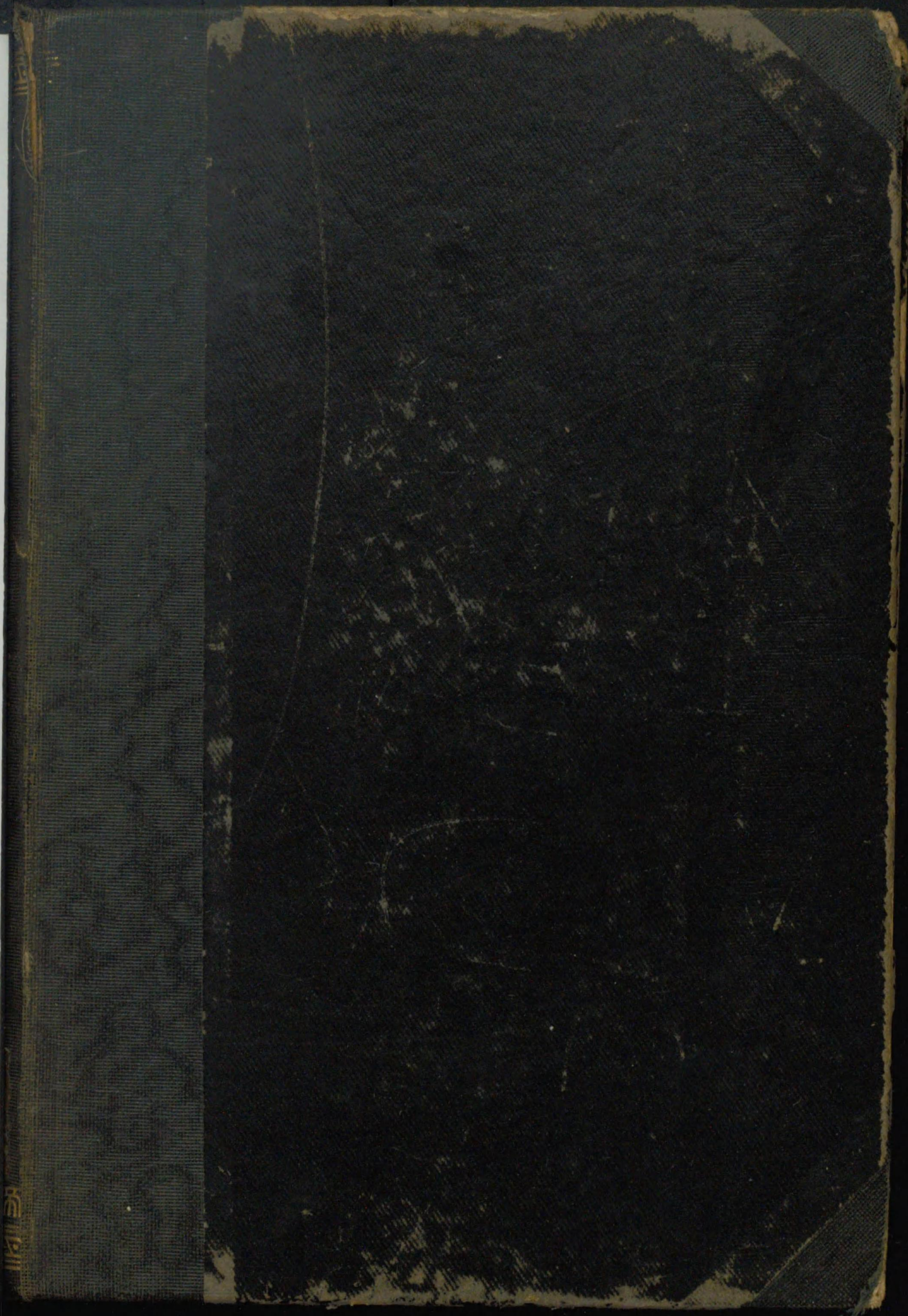
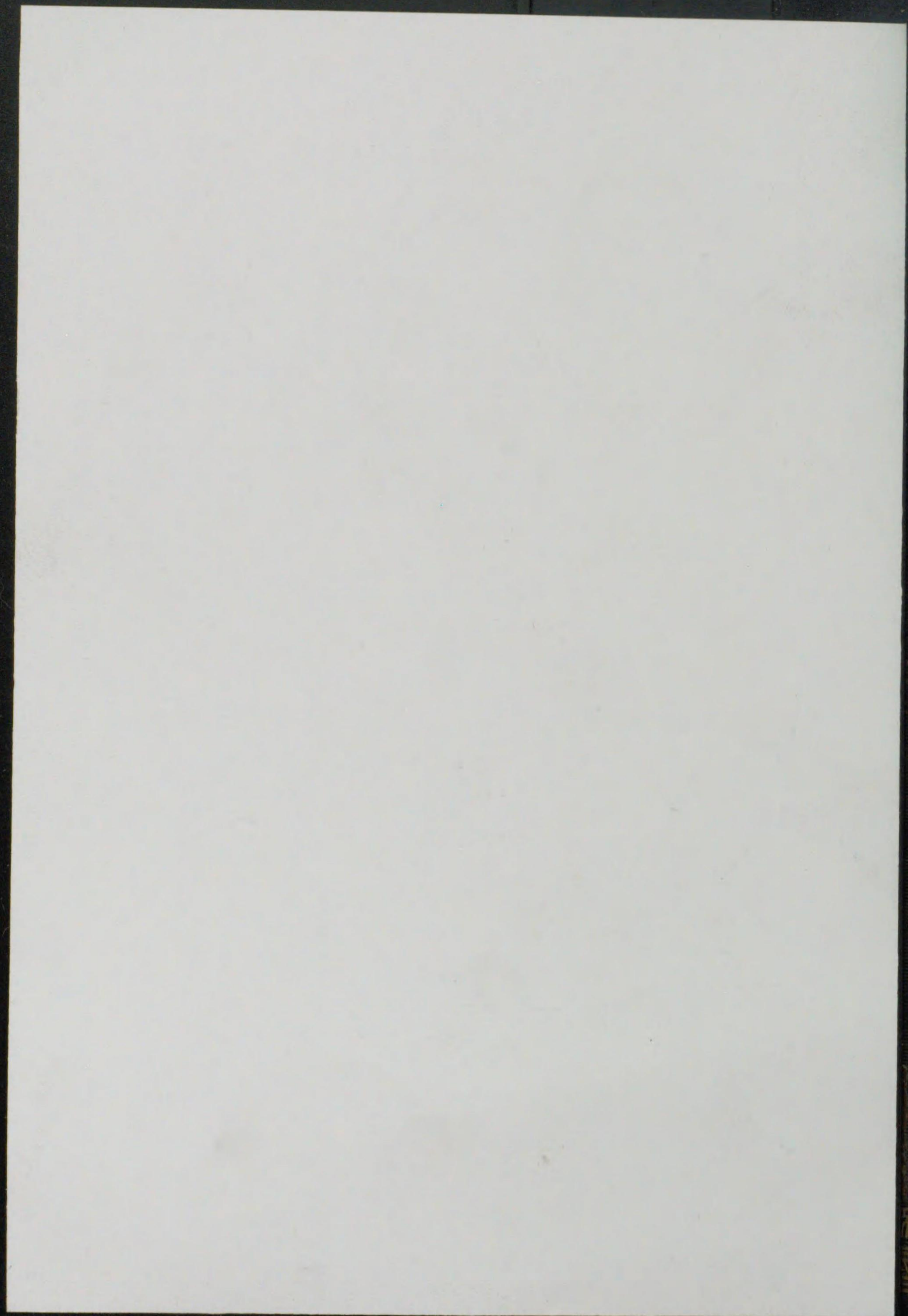
天馬空を行くやうに自在に大道を濶歩する者の聲を絶えず聞き続けやうとするには雜誌「大乘」の讀者となる事である。その社長たる大谷光瑞師を通して始めて吾人の耳に入る天來の聲はそれを纏めた著書でも讀める。しかし「大乘」によるやうに、月に又新にその警咳に觸れる譯には行かない。

竊に佛の深意を身に體して、世間の凡ゆることを常に咀嚼して居る師である。佛典の解説はもとより時論隨筆に至るまで、眞を穿ち切實を極めて居る。眼の開いた現代人としては、折角のこの好伴侶の大聲を聽く特權を棄て、は同じ時代に生きた甲斐があるまい。



62

609
240

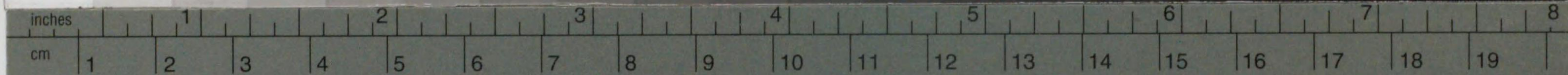


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

